

赤い船とつばめ

小川未明

青空文庫

ある日の晩方、赤い船が、浜辺につきました。その船は、南の国からきたので、つばめを迎えに、王さまが、よこされたものです。

長い間、北の青い海の上を飛んだり、電信柱の上にとまって、さえずっていました。つばめたちは、秋風がそよそよと吹いて、木の葉が色づくころになると、もはや、南の方のお家へ帰らなければなりません。寒さに弱い、この小鳥は、あたたかなところに育つように生まれついたからです。

王さまは、もうつばめらの帰る時分だと思つて、赤い船を迎えによこされました。つばめたちも、船に乗りおくれではならぬと思つて、その時分には、海岸の近くにきて、気をつけていました。そして、波間に、赤い船が見えると、

「キイ、キイ……。」といつて、喜んで鳴いたのです。

早く見つけたつばめは、それをまだ知らない友だちに告げるために、空高く舞い上がつて、紺色の美しい翼をひるがえしながら、

「赤い船がきましたよ。さあ、もう私たちは、立つときです。どうか、遠方にいるお友だちに知らせてください。」といいました。

なかには遠いところにおいて、まだ知らずにいるものもありました。そういうつばめは、村に他のいいお友だちができて、「まあ、まあ、そんなに急いで、お帰りなさることはない。」といわれて、引きとめられているつばめたちであつたのでした。

赤い船は、浜辺に四日、五日、とまっていた。そして、四方から、毎日のように集まってくるつばめを待っていました。もう、たくさんつばめが船に乗って、最後には、ほぼしらの上まで止まって、まったく、はいる席がなくなつた時分、静かに海岸をはなれたのです。

たいていは、月のいい晩を見はからつて、出発しました。なぜなら、長い海の上をゆくには、景色が見えなければ、退屈であるし、また途中から、船をたよつて、飛んできて加わるものがないとはかぎらなかつたからです。

あるとき、一羽のつばめは、船に乘ろうと思つて、遠いところから、急いで飛んできましたが、すでに船の立つてしまつた後でした。

そのつばめは、ひじようにがっかりしました。しかたなく、木の葉を船として、これに乗つてゆこうと決心しました。それより海のかなたへ、渡る途はなかつたのです。

昼間は、木の葉をくわえて飛んで、夜になると葉を船にして、その上で休みました。そ

のつばめは、こうして、旅たびをしているうちに、一夜や、ひじょうな暴風ぼうふうに出であいました。驚おどろいて、木の葉きはをしっかりとくわえて暗くらい空そらに舞まい上あがり、死しにも狂ぐるいで夜よの間あいだを暴風ぼうふうと戦たたかいながらかけりました。

夜よが明あけると、はるか目の下したの波間なみまに、赤あかい船ふねが、暴風ぼうふうのために、くつがえっているのを見みました。それは、王おうさまのお迎むかえに出だされた赤あかい船ふねです。つばめは、急いそいで帰かえつて、このことを王おうさまに申もうし上あげました。——王おうさまは、ここにはじめて、自みづからの力ちからをたよることのいちばん安あんしん心しんなのを悟さとられ、あくる年としから、赤あかい船ふねを出だすことを見合みあわせられたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「赤《あか》い船《ふね》とつばめ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：本読み小僧

2012年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い船とつばめ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>